

人間学を学ぶ月刊誌

[chichi]

致知

昭和51年8月16日 第三種郵便物認可
令和3年10月1日発行 毎月1回11日発行 通巻第556号

2021 November

11

WBA世界ミドル級スーパー王者

村田諒太 &

AthReebo社長

金沢景敏

オーボンウケタン

オーナーシユウ

河田勝彦 &

コートドール

オーナーシユウ

齊須政雄

特集

努力にまさる
天才なし



致知随想

題字・三井住友銀行元会長 小山五郎氏

三好鋭郎（スワニー相談役）

高田明和（浜松医科大学名誉教授）

渡邊孝経（長崎県教育庁体育保健課体育・スポーツ総合アドバイザー）

滝沢彩輝（画家）

平野仁司（宗仲寺前住職）

逆境に感謝

三好鋭郎

私は一九五八年に高校卒業後、防寒用手袋会社・スワニーの後継者として入社しました。父の会社を立派にしようという強い使命感に燃え、自社ブランドを世界に広めるべく一九六四年からサンプルを手に世界中を飛び回りました。その時の気がかりは商談以上に重さ二十キロにも及ぶ荷物を

運ぶことでした。私は生後六か月で患った小児麻痺の後遺症で右足が不自由なため、歩くことが困難だったからです。

三回目の海外出張先のニューヨークでとうとう荷物の重さに耐えきれなくなり、世界行脚もはやこれまでかと諦めた矢先、偶然通りかかった鞆屋で車輪つきトランクに巡り合いました。

それはまるで神の救いのような出会いでした。足が不自由でなければそれほど感激す

ることはなく、後に弊社の看板商品となる「スワニーバッグ」が誕生することもなかったでしょう。

その車輪つきトランクを購入したおかげで、以後百回近く海外でセールス行脚が実現できました。しかし、快適なトランクにも問題点はありました。当時のトランクは容量重視の大きな形状で、車に載

せるだけでも一苦勞。また、私はトランクを杖代わりに使って体を支えていたため、ト

ランクを先に飛行機内に預けてしまうと、広い空港内で体を支えるものがなくなり、不安感が尽きませんでした。

軽量かつ機内に持ち込める大きさで「動く手すり」にもなる「支えるバッグ」を欲してはいたものの、手袋とは全くの畑違いの製品のため、自分でつくる考えには至らずに三十年が過ぎました。

転機は一九九〇年代、バブル経済崩壊後に訪れました。不景気に加えて温暖化などの

様々な要因により、手袋の需要がそれまでの六割にまで落ち込んでしまったのです。一九七八年の社長就任以後、最大の危機でした。このままでは社員の生活が守れないと危惧した私は第二の柱をつくるべく、他製品の市場調査を始めたことをきっかけに、私が長年欲していた「身体を支えるバッグ」に挑戦することになったのです。一九九五年、

五十六歳の時でした。私がこだわったのは「体を



すぐに飛び起きて設計用紙に書き起こしたのは、取手を三から四段階に分けて伸ばすことで湾曲させ、中央に寄せるデザインでした。そこから台湾と中国の取手メーカーを数十回往復し、取手の工夫に加え車輪の動きにもこだわった結果、「スワニーバッグ」が誕生したのです。

引っ張って持ち歩くものだったトランクを、女性や高齢者でも難なく体を支えながら押せる仕組みにできたのは世界の常識を変える発明で、特許取得にも繋がりました。エジソンの残した「発明は九十九%の努力と一%の閃き」という言葉のように、私は閃きによってそれまでの努力が報われたことを実感しました。

しかし、製品化したものの、三年は売り上げが伸びませんでした。部門の累積赤字が四億円に達した二〇〇〇年九月には遂に撤退の選択を迫られてしまします。

起死回生策として打ち出したのは、お客様とのファーストコンタクトである商品タグ

の改変です。私がスワニーバッグに支えられて立っている写真と共に、生まれつき足が不自由なこと、海外出張中に出合ったトランクに救われたことなど、自身のストーリーを曝け出したメッセージを添えたものに切り替えました。

思いが通じたのか、徐々にお客様が商品に理解を示すようになり、小売店を中心に売り上げが向上し始めました。全国紙やテレビに取り上げられたことで知名度も上がり、売れないバッグから売れるバッグに変化したのです。

お客様のニーズに応えながら改良を重ね、現在は年間十一个以上が販売され当社の売り上げの二十五%を占める事業に成長しました。

振り返ってみれば、すべての始まりはこの不自由な右足でした。スワニーバッグのアイデアのみならず、幼少期から様々な逆境を乗り越えざるを得なかったからこそ、苦しさに耐えられる体質をいただいたと思っっています。ですから私は逆境という運命に心か

ら感謝しているのです。弊社にはお客様からの手紙が年間六千通も寄せられています。私はすべてに目を通して、これはというものは手帳に挟んで持ち歩いていきます。「これで三台目です。スワニーがなければ歩くことができません」「杖をつくのが恥ずかしくて出不精でしたが、スワニーのおかげで外出が楽しくなりました」など、多くの声が糧となり、八十二歳になるいまでも変わらぬ情熱で商品開発に携わっています。お客様により快適にバッグを使っていたりするために、これからもあくなき挑戦を続けます。(みよし・えつお「スワニー相談役」)

幸せは自分の中にある

高田明和

脳科学医としての現役を退いてから早二十年。いまは研究や執筆活動の他、脳に関する困りごとの相談を受けています。その中で最近特に多いのがうつ病です。

近年、うつ病をはじめ心の病の問題が頻繁に取り上げられますが、その要因の大部分が「HSP (Highly Sensitive Person) 気質」ではないかと考えています。環境に左右されやすく、人の言動に非常に敏感……そんな若者を多く目にするからです。多発しているひきこもりや自殺の問題は一部の事例にすぎません。コロナの時代が終わったら人類は心の病と闘う時代が来ると私は予想しています。

うつ病やHSPは脳ではなく心に起因しています。脳は心が世界を認識するための道具にすぎません。病院でうつ病と診断されると必ず処方されるのが脳の働きを刺激する精神安定剤ですが、本当に病に罹っているのは脳ではなく心です。心をケアしない限り、真の解決に繋がらないのです。私が皆さんに伝えたいのは、自分の幸せは自分にかかからないもので、心の病は最終的には自力で治す他に道はないということ。そして人は皆、己の心を幸せにできる力を持

支えても倒れない安定した取手」でした。開発の過程で、取手が中央にくるように設計する必要があると分かりました。最初に商品化したのは取手の両横にトランクのボックスをつけたもので、容量の問題で売れなかったものの、「このような支えるバッグが欲しい」というお客様の影響が糧となりました。

っているということですが。これはうつ病経験のある私自身の実感でもあるのです。

薬を服用せずにうつ病を克服できたのは、若い頃から続けた坐禅や禅の言葉が励みになったからです。私と禅との出会いは学生時代に遡ります。

昭和二十九年、静岡から上京して慶應大学医学部に入学。都会で裕福な生活を謳歌している慶大生に囲まれ、自分の考え方や生き方に全く自信が持てず、劣等感を抱きながら生活する日々でした。そんな中、古書店で偶然見つけた禅の本の中で「禅は自分で事の真偽を見分けることができる」という言葉を発見しました。

禅をやれば、自分で正しい判断ができるようになるのかもしれない——。そう考えた私は故郷の清水市で曹洞宗の居士禅（在家の禅）を布教されていた方を訪ね、坐禅の手ほどきを受けて日常に坐禅を取り入れ始めたのです。

大学院卒業後、九年間の米国大学院での助教を経て三十九歳で帰国しました。しか

し、アメリカとの文化や習慣の違いに困惑し、誰にも相談できず職場では孤独感に苛まれました。家庭では子供が言語の問題で学校でうまくいっていないなどの様々な困難が重なり、私は激しいうつ病を患ってしまったのです。

毎朝目が覚めると、たちまち「ああ、昨日何であんな馬鹿なことをしてしまったのだろう」という考えに取り憑かれ、漠然とした恐怖心で一日を過ごす日々。そのうち考えや行動が徐々に異常になり、相手の話していることをぼんやりとしか理解できない、会議中に訳の分からない発言をするなど仕事に支障をきたすようになってしまいました。

当時は抗うつ剤などない時代、私は思い切って学生時代から続けていた坐禅に集中することにしました。

坐禅で不安や妄想を消すと

いっても、簡単にできるものではありません。坐るとすぐに「俺はなぜこんなにダメなのだろう」「俺には将来はないのだ」という不安が全身を包み込みました。しかし、坐禅以外に自力で治す方法が分からなかったため、これが唯一の方法だと信じ、早朝と深夜に坐禅をすることに徹しました。

日中も不安感に取り憑かれ、困ったことには「困ったことは起こらない」と絶え間なく唱え、他の陰気な考えが浮かばないように努めました。

回復の兆しは思いも寄らぬ形で訪れました。うつ病を自力で治そうと決めてから約一年後、三月のある日のことです。朝日に向かって坐禅をしていると、突然、自分の周りからレンガのような固い殻がバラバラと落ちた感じがしました。私は直感的に「治った」と確信し、すぐに妻を呼びま

した。すると自分でも驚くほど声が明るくなって、身体も軽くなった感じがしたので、この不思議な感覚はいまでも鮮明に覚えています。

苦しみから脱却したからといってそれで終わりではなく、私の人生はここからがスタートでした。浜松医科大学で教授職を続け、退職後は名誉教授の称号までいただきました。八十六歳になるいまでも研究や執筆活動を続けられるのは、坐禅をはじめ日々心を平静に保つ努力を続け、心身共に健康を維持しているからこそだと実感しています。

学生時代にあるラジオ番組で聞いた名僧・中川宋淵老師の言葉が忘れられません。「私でも悟れますか」と聞いたアウンサーに対して、老師は「私のような者などと言っ

てはいけません。あなたも仏と同じ清らかな心の持ち主ですから」と答えられました。皆に仏の心が備わっているという言葉に私は感嘆しました。考えてみれば、うつ病を自力で克服できたのは、胸の内に宋

淵老師のこの言葉があったからだと思うのです。

私たちは互いに見えないだけで、それぞれの苦しみに取り囲まれて生きています。大切なのは自分の中に仏の心があることを信じ、坐禅に限らず自分に合った心を平静に保つ方法をコツコツと続けることです。少量の水でも毎日垂らせばいつか大器を満たすように、必ず自分の心をコントロールできるようなれます。

幸せは自分の中にある——活動を通して多くの人がそれに気づく一助となれたなら、それこそがいまの私にとっての幸福です。

（たかだ・あきかず）浜松医科大学名誉教授

根を養えば
人は大きく育つ

渡邊孝経

「県下一の道場ができた。おまえは県下一の剣道部をつくってくれ」

いまから三十二年前、長崎県の母校・島原高校へ体育教師として着任したのは二十八

